

ずいそう

“一本柔道”

谷本歩実



皆さんこんにちは！コマツ女子柔道部の谷本歩実です。この度の北京オリンピックでは多くの方々のご声援を賜ったことに深く感謝しております。この紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。

さて、今回の北京オリンピック後、“日本柔道とは？”と様々なところで耳にする機会が増えてきました。恐らく、メダル獲得数の減少やあまりの消極的な試合運び、審判に疑問を投げ掛けたいくなるようなジャッジ、これが柔道の技なのかと首を傾げたいくなるようなシーンなど、多くの方々の客観的評価が疑問として問いかけているからではないでしょうか。

私の一本柔道へのこだわりを話す前に、まず柔道の今日までの歴史を簡単に振り返ってみようと思います。

近代柔道は1882年（明治15年）嘉納治五郎先生が創設され、日本はもとより世界中に普及し始め、特に昭和39年には東京オリンピックの競技種目として取り入れられました。現在では国際柔道連盟への加盟国、地域は199カ国にのぼり目覚ましい発展を遂げています。ヨーロッパでの普及は著しく、特にフランスは日本の柔道人口の3倍にも及んでいると言われています。柔道は本来「精力善用、自他共栄」を基本理念とし「柔能く剛を制し、剛能く柔を断つ」を真髄としています。単に勝利至上主義ではなく精神鍛錬を目的とし、中学、高校の体育の授業に取り入れられているのも青少年の健全育成が目的とされているからです。柔道は本来、武道であり陸上や水泳のようにタイムや距離などの記録で結果を出すスポーツとは意を異にしていました。

柔道が全世界に普及し競技として取り入れられ、オリンピック種目にも採用されると本来の理念は二の次とし勝利至上主義にならざるを得なくなります。「柔道」が「JUDO」となりルールも随分と変わってきました。日本では一本を果敢に獲りにいく柔道スタイルが重視されますが、海外ではルールを最大限に生かした勝利優先の戦い方が重視されるようにも見受けられます。最近の柔道はジャケットレスリングとよく言われますが、日本選手の中にもそういった選手が珍しくありません。私の主観ではありますが日本人選手が日本柔道を放棄している現実があります。

さて、私なりの柔道観、そして信念である一本柔道へのこだわりについて述べさせていただきます。一本柔道とは華麗な技で誰が見ても分かり易い決まり技を修得し実践する事ですが、その前に一本を取る柔道の心の持ち方にあると考えています。その信念が限りないこだわりとなっているように思います。この事は皆さんと関連するお仕事と共通する事ではないでしょうか。家を建てるには基礎が重要ですね。柔道では戦える体力づくりに相当するように思えます。住む人のニーズを考えた設計、天災から守る施行、技法は柔道における心の持ち方、反復練習、技の磨き、相手との対応術に相当するのではないのでしょうか。そして住む人の満足感は正に建てる人達の匠の技、こだわりがあってこそ得られるものだと思います。よく神社、仏閣を訪れたり近代的ビルを見たとき心が洗われる時があります。きっとデザイン、技法、施行の中の造る人たちの深く刻み込まれたイメージ、執念、飽くなきこだわりの結果が人々の心を動かすのでしょうか。

北京オリンピックでの決勝戦の直前、不思議な感覚に捕らわれました。それは、心の底からわくわくする感覚と充実感と感謝の気持ち。腰の怪我を乗り越えて最高の舞台上で最大のライバルと戦える喜び、会場に響き渡る応援。夢の舞台オリンピックに挑む全てのプレッシャーが力に変わり、溢れる気持ちで胸がいっぱいでした。ここまでの険しい道りを一本柔道で乗り越えてきた信念がそうさせたのだと思います。

一本勝ちを念頭に置く事で自ずと自分を極めていく事に繋がり、一本勝ちを意識する事で本質が見据えられる。自分の柔道に対する心を極め、結果を出して行く事が一本勝ちへの飽くなきこだわりを生むことになり、アテネ、北京とオール一本勝ちで2連覇する事が出来ました。一本柔道を貫いていなければ、この2つの金メダルは無かったと思います。気が付いたら、こだわり貫いた一本柔道に支えられてきたんだなあと改めて思いました。

そしてなによりも多くの方々に支えられ、大きな声援で自分の背中を後押しして頂いたことが2つの金メダルの最大の勝利への貢献であったと深く感謝しています。